

論文内容の要旨

氏 名 : 石井 拓洋 (いしい たくよう)

論 文 題 目 : 「アーロン・コーブランド——『アメリカらしさ』の革新性と映画音楽への展開」

本論は、20世紀のアメリカ合衆国〔以下、アメリカ〕を代表する作曲家アーロン・コーブランドの1930年代から40年代の音楽活動について、歴史修正主義の観点から再考するものである。「アメリカ音楽の旗手」、あるいは「アメリカ全世代の声」とも称されるコーブランドの、アメリカにおける今日の一般的な受容像は、1990年、生誕90年に際し、第101回アメリカ連邦議会上院において彼に贈られた賛辞にも読めるとおり、文化的及び政治的側面における保守的性格を帯びている。かかる受容の存在は、また、建国記念日の式典や海兵隊リクルート、または老舗大企業の広告など、アメリカの「保守」的性格の強い局面において、コーブランドの響きが共にあることにも裏付けられる。

一方で、このような今日のコーブランド像は、しかし、この作曲家の内実をどれほど伝えているものだろうか。近年のアメリカにおける当該研究領域は、コーブランドの政治性をめぐる諸相を徐々に明らかにしてきた。なかでも特筆すべきは、1953年1月の共和党ドワイト・アイゼンハワー大統領の就任記念演奏会において、事前に予定されていたコーブランド作品の演奏が急遽中止に追い込まれたり、また、その数ヶ月後には、赤刈りでしられた共和党上院議員ジョセフ・マッカーシーに召喚され査問を受けてもいる。つまり、これらはいずれも、「疑わしき共産主義への関与の跡を数多くもち」、国際的共産主義者である疑いに端を発するものであった。すなわち、今日では「アメリカそのもの」とも称される彼であるが、しかし、かつては連邦政府から非米活動分子とまで目された事実があった。これを勘案するならば、今日のわれわれの多くが想起する、コーブランドの姿は、あるいは、すでに何かが捨象された後の姿であるかもしれない、さらにまた、あらたな含意が社会的に構築されたあとの姿ではないかとの推測も可能であろう。

アメリカでの当該研究の先行事例において、コーブランドの政治性に研究的視点が向いたのは、冷戦終結後であり、本格的な考察がなされるのは今世紀に入ってからである。なかんずく、日本国内においては先例がなく、十分な研究蓄積がなされていない状況である。

そこで本論では、今日的なコーブランド像を相対化した上で、彼の主要作品が創られた1930年代から40年代を対象として、コーブランド自身とその作品を歴史化し、それらを当時のアメリカの歴史社会的動向との関係のなかで考察した。それを通して、「現代アメリカ」の形成過程におけるコーブランドの文化的側面での役割りや位置づけを明らかにすることを目的とした。また、コーブランドやその作品を歴史のなかに位置づけて考察するための方策として、マルクス主義批評家のフレドリック・ジェイムソンにおける「政治的無意識」の視座を援用した。それは、コーブランドは戦後、みずからの政治的言動を表明することを一切控えたためであり、そのなかで考察を進めるための適切な方途と考えた

めである

本論は、序章と終章のほか、全9章から構成される。第1章はコーブランドを歴史的な文脈のなかで考察するための予備的考察を行なった。彼の美学的信条が示される言及を精査し、西欧近代的視座ではなく、特殊アメリカ的な視座から考察する必要性を確認した。また、文化冷戦の視点を取り入れて、左派アーティストの戦後の受容の変化の事実を確認した。第2章では先行研究の批判的検討を通して、以降で本論が議論すべき3つの論点を抽出した。1つ目は、「現代アメリカ」の形成におけるアメリカ20世紀の革新主義の位置づけであり、2つ目は、コーブランドの1930年代の活動における革新主義から受けた影響、最後3つ目は、彼の1939年以降の映画音楽実践と革新主義との関連である。以降の章はかかる3つの論点にしたがって構成される。

まず第3章では、1つめの論点を考察すべく、20世紀アメリカの革新主義運動の内実を論じ、このアメリカ独自の運動において、社会的矛盾の淵源たる二項対立を科学的知見で止揚していく「中間の道」の追求がなされたこと、統計学に基づく広告戦略によって、アメリカに、はじめて「庶民=平均的アメリカ人」が現れたこと、そして、それらを通じて国力が増し、20世紀前半に「現代アメリカ」の素地ができたことを論じた。

第4章から第7章までは、2つ目の論点を考察した。第4章では、1930年代の彼の活動が、音楽的人脈のみならず、写真家アルフレッド・スティーグリッツを中心とするニューヨークの文化人サークルとの関連から多く影響をうけたものであることを論じた。第5章では、革新主義的理念に導かれ、彼がそれまでの「ジャズ」語法を再考し、ドイツ・バーデン・バーデンの音楽祭にふれた「共同体の音楽」を志向するに至る経緯を論じた。第6章は、彼の「アメリカらしさ」とは政治的保守から生まれたものではなく、「異端の副大統領」ヘンリー・ウォーレスにも通じる左派的政治運動と関連する革新的な土壌から生まれたものであること、そして、1935年を境に彼の「アメリカらしい」音楽的表象、すなわち「パストラル語法」が確立されるに至る直接の契機には、モスクワから発せられた「人民戦線」に多く拠ることを指摘した。第7章では革新主義的動向と、「共同体の音楽」への志向の帰趨の一つとして、彼が映画音楽の地平に可能性をみたことを論じた。

第8章と9章では、上記3つ目の論点に触れ、コーブランドの映画音楽実践と革新主義、および「共同体の音楽」への志向との関連を考察した。第8章ではドキュメンタリー映画『都市』（1939）を取り上げ、間テクスト性において、その音楽テキストを分析した。ここでは、「パストラル語法」によって「アメリカらしさ」が表現されているとともに、革新主義の信条をもつ彼が、真に解決が困難な社会問題に対峙するとき、その象徴的解決行為として不協和音が現れることを明らかにした。第9章では、映画『廿日鼠と人間』（1939）を取り上げた。ここでは「パストラル語法」が、その表現やその社会内での成熟を経て、ついに19世紀的なアメリカの表象にも適用され、本来は「未来」にのみ消失点をもつ革新的なるその語法が、遡ってアメリカの過去にもまた投射されることで、ヴァン・ワイク・ブルックスのいう「役に立つ過去」を形成していることを指摘した。

終章では、考察のまとめとして、革新主義によって現れた「現代アメリカ」の中で活動するコーブランドの位置づけを、ヘンリー・ルースの「アメリカの世紀」と、ヘンリー・ウォーレスの「庶民の世紀」とを対比を通して再定位した後で、「現代アメリカ」の形成過程において、コーブランドが、音楽的

側面における「役に立つ過去」を作る役割を担ったことを結論した。また、その後の冷戦期における彼の受容の変遷について論じた。